

西洋美術史ゼミ 第四回補足資料

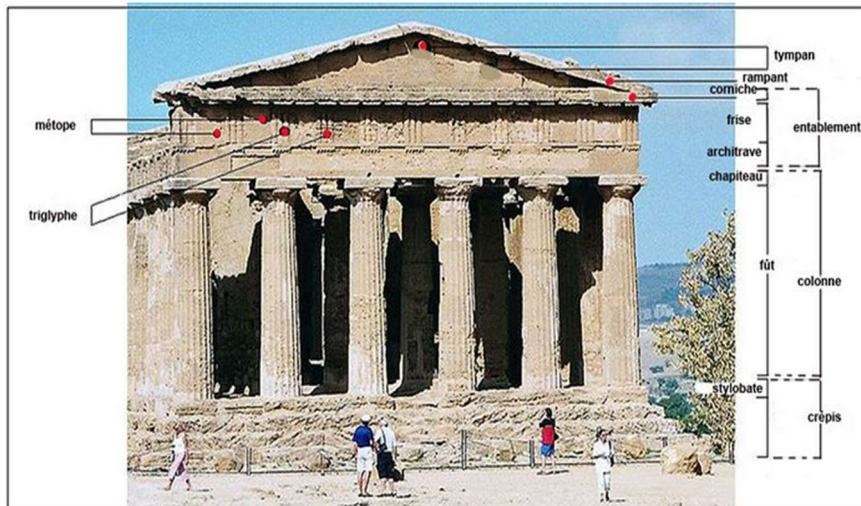
語釈

- 等質化

「より魅力的で、心地よく、寛大なものへの変質」（高階 秀爾「増補新装 カラー版 西洋美術史」, 美術出版社, 2002）。複数の事物の質が等しくなること。今回の発表の文脈では、ヘレニズム文化がローマ文化と同等に扱われるようになったことをいい、その結果ローマはギリシアの模倣から脱してローマ固有の建築が生み出された。

- 基壇 (Stylobate)

建物への水の浸入を防ぐため、水はけを良くするために平地の上に石を組み、高くした部分。(画像右下)



この写真の作成者 不明な作成者は [CC BY-SA](https://creativecommons.org/licenses/by-sa/4.0/) のライセンスを許諾されています

- 化粧漆喰

石灰に大理石粉、砂などを混ぜて作った建築材料。スタッコ (Stucco) ともいう。

- 支持体

紙、布、石壁など絵や字を書く面を構成しているもの。

- フレスコ

壁に漆喰（石灰を主成分とする建築材料）を塗り、この面が固まらないうちに水や石灰水で溶いた顔料で描く技法。やり直しがきかないが、耐久性が高い。化学的には、水に石灰が触れ石灰水ができ、それが空気中の炭酸ガスに触れることで炭酸カルシウムの被膜ができる（ $\text{Ca(OH)}_2 + \text{CO}_2 \rightarrow \text{CaCO}_3 + \text{H}_2\text{O}$ ）。炭酸カルシウムは水に溶けないためフレスコ画は保存性に優れる。



この写真の作成者不明な作成者は [CC BY-ND](https://creativecommons.org/licenses/by-nd/4.0/) のライセンスを許諾されて

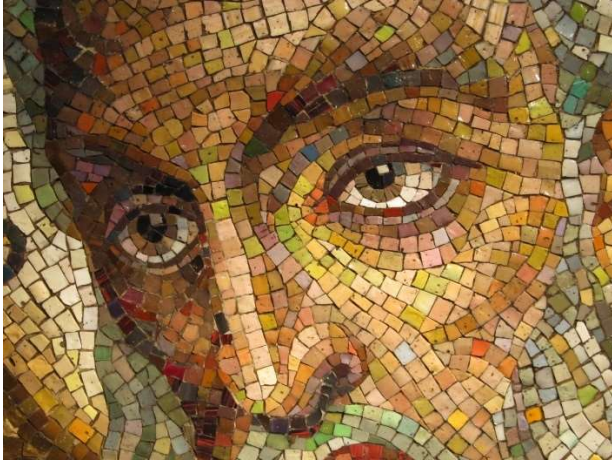
- テンペラ

卵で顔料を練って作った絵具。またはこの絵具を用いて書いた絵画の技法である。より狭義には「卵テンペラ」という。乾燥すると水に侵されなくなることと、油彩画のように経年により色が変わらないことが特徴である。



- モザイク

鉱石や陶片、ガラスなどの小さな塊片を下絵に基づいて配列し、固定させた装飾芸術の一形式。主に壁画や床面の装飾に用いる。



- 建築用語：アーチ、ヴォールト、ドーム

「石像の柱と柱の間に天井をかけるにあたって、長生きの梁を渡さずに、互いにもたれあうような形で円弧上に石を積んだとすれば、アーチが出来上がる。そのアーチを平行移動させて通路上にするとヴォールトとなり、その場で三六〇度回転させるとドームとなる。いずれにせよ石どうしが協力しあって自分たちだけで天井を作る。」（中村, 2021, p.188）

<アーチ(Arch)>



<ヴォールト(Vault)>



< ドーム (Dome) >



講義の補足

- 中世の絵画技法

フレスコ、テンペラ、モザイクが中世の絵画（壁画）技法としてよく使われていた。これらの詳細は前述の語釈の通りである。

参考文献

前回の補足資料に記載しなかったものを記す。

1. 森田恒之「画材の博物誌」, 中央公論美術出版, 1986
2. “Neo-Attic”. Wikipedia. 2022年2月8日. <https://en.wikipedia.org/wiki/Neo-Attic>
3. “Vulca”. Wikipedia. 2022年2月8日. <https://en.wikipedia.org/wiki/Vulca>
4. 中村圭志「宗教図像学入門」, 中央公論新社.2021
5. “Pompeian Styles”. Wikipedia. 2022年2月9日. https://en.wikipedia.org/wiki/Pompeian_Styles
6. “Sarcophagus”. Wikipedia. 2022年2月9日. <https://en.wikipedia.org/wiki/Sarcophagus>
- 7.